View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

学院史編纂室共同研究報告

二〇〇二年度から始まった共同研究は、二年間を一区切りとして活動しているが、第六期の一年目に当たる二〇一二年度は次のテーマ、研究組織で行った。

研究テーマ	研究員
院長研究 ―ランバス、ニュートン、ベーツ―	○神田　健次（神学部） 池田　裕子（学院史編纂室） Daniel Harald Dellming（高等部） 舟木　譲（経済学部） 村瀬　義史（総合政策学部） 山内　一郎（名誉教授）
関西学院の戦前・戦中・戦後	○福井　幸男（商学部） 打樋　啓史（社会学部） 神田　健次（神学部） 田淵　結（教育学部） 辻　学（広島大学大学院） 中道　基夫（神学部） 山　泰幸（人間福祉学部）

（○印・主任研究員）

一　院長研究―ランバス、ニュートン、ベーツ―

「院長研究」の共同研究は、これまで、ランバス、ニュートン、ベーツを中心として研究している。

神田主任研究員は、今年度がベーツ第四代院長がスクールモットー“Mastery for Service”を提唱して百年を迎える記念すべき年でもあったので、ベーツ関連の調査・研究を行った。ひとつは、六月に刊行された『キリスト教学校教育同盟百年史』の共同編集に携わってきた中から、これまで学院では知られていなかったベーツの教育同盟への貢献について、小論稿「キリスト教学校教育同盟と関西学院―ベーツ院長の関わりを中心として」（『学院史編纂室便り』第三五号）を発表した。特に、同盟会長としての「開会の演説」（一九二五年）と同盟の重要プロジェクトに関わる「基督教主義教育の原理」（一九三三年）の意義について考察した。その他には、『母校通信』（一三〇号）で「東京と山梨におけるベーツ先生」というエッセーを掲載し、また初等部で「カナダとベーツ先生」について講演を行った。

池田研究員は、八月二三日から九月四日まで、C・J・L・ベーツ第四代院長に関する調査と資料収集のためカナダを訪れ、モントリオールとトロントを基点に関係地（故郷、

墓地等）を巡った。その際、モントリオール在住のご令孫アルマン・デメストラルさんとチャールズ・デメストラルさんに大変お世話になった。成果は、『学院史編纂室便り』第三六号（「ベーツ街道をゆく！」）と『関西学院史紀要』本号（「ロリニャルから世界へ」）で発表している。これは、ベーツが高等学部のモットーとして“Mastery for Service”を提唱してちょうど百年を迎える年に相応しい調査であった。また、現地でアルマンさんに交渉した結果、ベーツが残した写真アルバム（段ボール二箱）を長期間お貸しいただけることになった。写真資料により、ベーツ研究のさらなる進展が期待できる。

この他、ベーツに関しては、小冊子 *Thus Spoke Bates II* を五月に作成した。また、吉岡美国第二代院長に関する小冊子『天の時、地の利、人の和』を七月に作成した。広報誌『K. G. TODAY』には、「“Mastery for Service”のルーツ」「学生会のはじまり」「敗戦間近の卒業式―失われた卒業証書」「二足の草鞋」「国際感覚」「失われゆく母校の記憶」を発表した。これらは、日本語だけでなく英語でも公開している。少しずつではあるが、英語で発信を続けてきたことは、夏にカナダを訪問した際、大変役に立った。

主任研究員　神田　健次

二　関西学院の戦前・戦中・戦後

「関西学院の戦前・戦中・戦後」の共同研究は、一二五周年の記念出版事業として位置付けられている『関西学院事典　改訂増補版』の刊行にむけての作業に着手してきた。特に、今年度は『関西学院事典』における「人物」の項目を中心に、これまでの記述が不十分であった箇所、誤りであった箇所などについて再調査を行い、書き直しの作業を行ってきた。とくに、今回は商学部において「商科開設百周年記念誌発刊事業」がスタートした年であり、これと連動して、商科開設の理念構想を描き、学生教育にも心を砕いた木村禎橘教授をはじめ、芝川家と甲東園のかかわりなど、事典に記載すべき新規事項の調査にも積極的に取り組んでいる。とくに、甲東園駅設置誘致にあたり、芝川家が東側一万坪を阪急電鉄に寄付して実現したなど歴史の掘り起こしを行っている。他の多くの記念誌委員にも編集協力を得ている。

主任研究員　福井　幸男